Ⅱ　主題への取り組み

1　主題設定の趣旨

(1)　「表現する力を育てる実践」を基礎として

本校開設から昭和56年度まで4年間にわたり、子供達に自己を表現する力を身につけさせることを目指して、「表現化に視点を当てた教育課程の編成とその展開」を主題に研究に取り組み実践を重ねてきた。このことは、自己の表れに重点をおいたものであったと言える。

今、子供達は、明るく活動的で、たくましくなってきた。それは、社会自立のための重要な力であると本校で考えている「表現する力」が身についてきたことを示すものであり、過去4年間の実践の現われであろう。従って、表現化に視点を当てた開設以来の研究実践は、今後共、本校の取り組みの基礎となっていくものと考えられる。

(2)　主題の設定

このような、「表現化」に視点を当てた従来の取り組みを継承する一方、私達は新たに、表現されるべき心的内容の充実を目指した取り組みを加えることにした。もち論、表現化に於てこの点が忘れられていたわけではないが、今回はその点にあらためて注意を向け、両者に均しく力点をおいて実践を進めることにしたものである。こうして生まれたのが、今回の主題「豊かな心をもち、たくましく行動する。」である。これにより、内面と表れとが調和しながら、より高い水準に発達していく姿を思い描いたのである。ただ、このような捉え方では、障害のない一般の子供達を対象にした場合と同じであり、本校に特にふさわしい主題とは言えない、と言う見方がでてくるかも知れない。もとより、障害のある者も、ない者も、教育の究極的な目標は共通であるから、一般の子供達に当てはまる主題を本校がかかげたとしてもおかしくはない。しかしながら、この主題に於て私達の考えているのは、以下述べるように、障害児の教育に必要な具体的内容をもったものである。その内容は、未だ不完全なもので、周囲からの批判により、また私達自身の今後の実践の中で、修正されるべきものではあるが、現段階で考えている内容のごく概略をここに記録しておく。

2　主題に対する基本的な考え方

(1)　心と行動（心的内容とその表れとの関係について）

「豊かな心」と「たくましい行動」と言う時、この二つは、言うまでもなく密接な相互作用をもっている。このうちのどれが先かという議論はおくとして、外に向ってなされた行動はフィードベックされて心的内容をより豊かな（鋭い・細かな）ものにし、こうして豊かになった内面はいっそう高次の行動を可能にする。このような相互作用がくり返えされて子供達は発達していく。また、表情や身ぶりやことばのような、観察し得る外的な行動は内面をよく反映して、その間に明確な境界を設けることもむずかしく、ここでも両者の密接な関係をみることができる。ただ両者が強く結びついているからと言っても、教育場面に於ては、一方だけを強化して後は他方が結果的に向上するのを待つ、と言った方法をとるわけにはいかない。そういうわけで、新しい研究主題のもとで、両者に働きかける教育を目指すことにしたのである。

(2) 「豊かな心」について

「豊かな心」という表現は、研究主題としてはあまりに抽象的、ムード的なものに感じられるかも知れないが、実は私達は、このような表現の中に、おおよそ次のような内容を包含させ、これらを向上させていくことを考えているのである。

○知的内容……認知能力、言語の理解力

○情緒的、意志的内容……感情と鋭さと安定、意志

○道徳的、社会的内容……善悪の判断、協力的態度

こうしてあげてみると、いかにも羅列的にみえるが、これらは相互に深いつながりがあり、決して個々ばらばらに働くものではない。またこれらは一般の子供達にもあてはまる内容であろうが、精神遅滞児の教育に於ては特に必要なものであり、さらにその指導法となると、具体的な方法が工夫されねばならない。

(3) 「たくましい行動」について

「たくましい行動」については、その内容も比較的想像しやすく、その内容をあまり立ち入って説明する必要もないであろう。すなわち、気力、体力ともに力強く積極的に課題に取り組むことを求めているものである。その表現は動作的な分野だけでなく、言語的にも、また集団的な場面にも及ぶものである。ただここでつけ加えておきたいのは、「たくましい行動」というものがしばしば外に向って表出される、目に見える積極的な行動だけと受け取られやすいのに対して私達は「抑制的行動」をも考えているということである。すなわち、場面に応じて「しない」「言わない」「止める」こともできる子供を育てるのが私達の目標であり、これにより、「表出」「抑制」とのバランスのとれた「たくましい行動」が得られるわけである。

3　各学部の取り組みについて

本校は小学部・中学部・高等部の3つの学部から成っており、児童生徒の年齢幅が非常に大き

い。従って、この研究主題に対する各学部の理解や取り組みにはそれぞれの独自性が必要であり、またその間に関連性が求められる。さらに児童生徒一人ひとりの発達や障害もさまざまで、画一的な指導ができないことはいうまでもない。各学部がこれらのことにどう留意しているのか、その具体的な内容は以下の記述において示されるが、ここでは各学部の取り組みの基本的な考え方を略記しておく。

(1) 小学部

小学部は6年間という長い期間に及んでいるため、その間における児童の変化も大きく、一方、出発点となる低学年においては、児童の発達の遅れが著しい。そこで先ず低学年においては、「豊かな心、たくましい行動」を目指す最も基礎的な段階と位置づけ、学校の生活に慣れ、楽しい気分で友達や教師と一緒に遊び、学習できることをねらいとする。中学年から高学年にかけては基礎を確立する段階とし、楽しい気分の中で本格的に主題の内容に取り組む。学習形態としては、「経験」を大切にして「生活単元学習」中心のものとし、必要に応じて他の学習形態を関連させるものとする。

(2) 中学部

中学部は義務教育の終了段階にあるが、本校では高等部進学を前提としているので、中学部で教育の完成を目指すことはしない。しかしながら、社会参加の時期も次第に近づくところから「生きてはたらく力を育てる」ことを明確に意識して主題の内容に取り組む。すなわち、小学部での基礎固めを受けて、「豊かな心、たくましい行動」をいっそう発展させ、これにより高等部における完成段階への移行をはかる。学習形態としては「生活単元学習」と「作業学習」とを並行して行う。さらに「教科学習」をも行って、「生きてはたらく学力」の定着をはかる。

(3) 高等部

高等部は本校教育の最終段階に位置し、社会参加が目前の課題であるところから、社会人・職業人となるに必要な資質を最大限に身につけさせることを目標とする。すなわち、「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」の完成を目指す。学習形態としては「作業学習」を中心に置いて各種の作業コースを十分に経験させる。また職場実習をも経験させることにより、積極的な進路指導を行う。

㈜ 障害者の社会参加（社会自立）を考える場合、一人ひとりの能力を高めることが「重要」であるが、一方、社会の側からも歩み寄って、受け入れる構えを作ることが「必要」である。われわれは、子供達に対して要求するばかりでなく、社会にはたらきかける責任を負っていると考える。